

小林多喜二の恋

— 大正時代，拓銀時代 2 —

倉 田 稔

目 次

はじめに

- 1 タキに会う
- 2 多喜二の美人好き
- 3 小樽の遊里
- 4 田口瀧子
- 5 タキあて手紙
- 6 商大受験
- 7 瀧子を救う
- 8 タキとの生活
- 9 初体験
- 10 瀧子の家出

はじめに

本稿は、小林多喜二と、彼の生涯の恋人とされる田口瀧子との、初めのころの話である。彼の思想と行動を知るには、この彼女との話だけでは分からない。ここでは残念ながら、紙数の制限のために、この話だけを孤立して取り上げる。なおこの稿は、多喜二伝（11）にあたる。

1 タキに会う

「大正一三年の秋，斎藤次郎，渡辺 [善之助]，それに舞踏病という手がひ

とりでに踊り出す奇病にかかっていた多喜二の同窓生たちが、山遊びの帰りに寄ったヤマキヤという小料理屋で、すてきな若い美人を発見したと言う話に、好奇心を持った多喜二がそこで改めて、田口タキとめぐりあった。彼の最後まで愛し合った悲しい運命の女性。」嶋田正策はそう書いた⁽¹⁾。田口瀧子である。多喜二は、1924年10月に初めてタキと会った。瀧子は、タキ子、そして愛称としてタキと書かれる。手塚の伝記『小林多喜二』には、こう書かれている。

「その年 [1924年] の十月ころ、多喜二は田口タキとはじめて遭った。

田口は入船町のやまき屋という小料理屋の美人で評判の酌婦だった。港町の小樽には公娼や私娼が比較的多かったが、やまき屋はそうした集団的な区域とは別に、裏街のところどころに二、三軒ずつ軒をならべ、のれんをさげた小料理屋ふうの店で、小樽では『そば屋』とよばれていた。

彼は『クラルテ』の仲間たちに誘われて、人生探求的な好奇心からでかけたのであったが、田口タキは彼に深い印象をきざみつけた。⁽²⁾ やまき屋は、入船山手の一角にあった。ここで入船とあるが、当時は入舟町（いりふねちょう）と書かれた。現在は、入船町である。この記述には疑問が出ている。

二木さんによれば、入舟町にこういう意味の「そば屋」はなかったし、タキの店は信香にあったと聞いている、と言う。また彼女の調べによると、「やまき屋」という屋号の店が信香にあった⁽³⁾。信香町（のぶかちょう）というのは、小樽の市内の町で、北廓や南廓という遊廓とは違うが、その種の店が多く集まっていたのだった。

小笠原克氏の話⁽⁴⁾も、手塚の記述を踏襲したか、あるいは同じ意見であ

(1) 島田の稿、『緑丘』42)。

(2) 手塚英孝『小林多喜二』新日本出版社 上、99-100 ページ。

(3) 二木初子さんインタビュー。当時、小林家の近くに住んでいた。

(4) 小笠原講演。

る。だが、やはり手塚説は正しい。というのは、嶋田正策氏は、その場所を確証しているからである⁽⁵⁾。

タキが勤めていた傘屋が入船町にあることは、まちがいない。嶋田正策氏自身が訪れている。多喜二とは別に、正策氏はタキを見に行っている。入船町の大通りを下から右に行くと花園公園へ行くが、そこへは行かず、その曲がる所を少し上がったあたり、つまり通りの左側にあった。その手前に左折道がある。(その場所の地図は、拙稿「嶋田正策小伝」(『人文研究』79しゅう)を参照。)

武田暹は書く。「海岸線から山ノ手へかけて縦にほそ長い入船町の、その山ノ手にちかい通りに面して、瀧子が酌婦をつとめている「やまき屋」があった。その他に二、三軒の小料理屋がひとかたまりにあやしげなのれんを下げていた。」⁽⁶⁾

次に、多喜二が仲間たちに誘われて出かけたというのは、誤りである。

嶋田は書く。「映画『小林多喜二』⁽⁷⁾では、友人たちに連れられていやいやヤマキ屋へ言ったことになっているが、私は彼が積極的に自分から行ったと思う。」

実際は「小林の疋商の同級生斎藤次郎、渡辺善之助、他一名が紅葉狩りの帰途立寄った呑み屋「傘屋」で美人を見つけた事にはじまる。」⁽⁸⁾この三人が、「素敵な若い美人を発見したという話に、好奇心を持った小林が」⁽⁹⁾その女性を訪ねて行ったのである。それがタキであった。

紅葉狩りに行ったのは、上記の3人で、他1名というのは、その時手がブルブルふるえる病気であった友人だった。多喜二は、この紅葉狩りには行かなかった。紅葉狩りとは、紅葉を見に山に散歩にゆくことである。美人に弱

(5) 拙稿「嶋田正策小伝」(『人文研究』79しゅう, 1990年3月)。嶋田氏はそこで地図で示している。

(6) 中津川俊六 [=武田暹]「小林多喜二の恋」(『婦人公論』1949年1月)

(7) 山本薩夫監督, 山本圭・中野良子主演。

(8) 嶋田正策「多喜二の恋」(『民主文学』1988年2月) 132ページ。

(9) 同「小林多喜二のある一面」(『緑丘』22) 18ページ。

いという多喜二に、この3名のうちの誰かが、やまき屋の美人を知らせたのである。多喜二はそれを聞いて、出かけてみた。こうして、手塚の記述も映画での描写も、間違いである。

嶋田氏もタキが美人だと言う。手塚も「非常な美人である。」としている。多喜二は面喰いだった⁽¹⁰⁾。嶋田は、タキの弟である宮野に、タキのことを、「美人だった。映画スターなんてもんでなかったね」と言った。

こうして多喜二は、美人だという噂を聞いて出かけていったのだったが、そこでタキに会った。入舟町の、南廓（＝公認の売春施設）の手前に、半ばもぐりの淫売窟があった。それがヤマキ屋である。そこに瀧子が働いていた。

2 多喜二の美人好き

多喜二が美人に弱かったこと、美人好きであったことについて論じたい。右遠氏のいう「面喰い」の点である。かつて述べたが、石本武明少年と庁商からの帰りに、おやつを食べながら多喜二がおしゃべりをしている際、多喜二が、どこどこの誰はシャンだ、とかいっていた⁽¹¹⁾。

島田正策氏は、次のようなエピソードを語っている。片岡亮一は、多喜二の庁商時代の親友である。また小樽高商にも1年遅れで入った。さて片岡の家の近くに、小川医院の小川郁栄という美人がいた。彼女は文学少女だったし、後に『新樹』第1号に寄稿する。片岡は美男子であり、片岡は彼女が好きだった。多喜二は彼女が美人だということを聞いて、好きになった。多喜二は美人にかんして露骨であった。ところで彼女は背が高かった。片岡は、だから多喜二にたいして「大木に蟬だ」と言った。

なぜ多喜二は美人好きであったのか。もちろん誰でも美人好きではある。だがそれについていくつか指摘したい。

(10) 右遠，講演・小樽多喜二祭にて。

(11) 石本，前出。

第1に、当時の男女関係である。当時は男女交際が自由でなかった。男性は、そういう状況では、姉妹は別にして、異性＝女性を理想化するものである。それは異性を知らないからである。学校でも男女共学ではなかった。中等学校になれば、男女は別の学校へ行った。小学校でも女子小学校があったし、普通はクラスが男女別であった。生徒の数によっては、男女共学組が作られたことはある。こうして男女がそれぞれ人間的に交際するチャンスは少なかったのである。一般的に言って、第二次大戦が終るまで、日本人は、男性は女性を異性としてしか見なかった。儒教の影響であろう。「男女七歳にして席を同じうせず」の時代であった。多喜二の時代も、女性を人間として見るよりも、むしろ異性として見た。そしてそれは、人間として実際に女性と交際するチャンスが少なかったから、やむを得なかったのである。女性を人間として見る場面や体験が少なければ、どうしても女性を異性として見ることになり、人間として見る余裕がなくなる。またそうなると、女性の内面や人間面ではなく、いきおい外面を見ることになる。遠くから、実際の女性・人間としてでなく、女性を観察することによって、どうしても外面だけしか見えないことになる。こうして外面の1つである美人かそうでないか、という点も、それだけ関心の対象になってくる⁽¹²⁾。

第2に、経済的問題である。女性を恋愛の対象にしたり、結婚の対象にする場合の一般論である。一般に、女性が自立している社会を除けば、男性が結婚する場合と、女性が結婚する場合とは、異なる。女性は結婚をただそれだけでなく、複雑な立場で考えざるをえない。女性にとって結婚は同時に就職でもある。男性にとって、結婚と就職とは別個のものである。結婚の場合、女性は相手の男性の経済力が問題である。結婚して生涯、並の生活ができないと困るのである。そこで相手が経済力があるか、生活力があるか、ま

(12) 筆者の母の例だと、こうである。彼女は、社会階層では、東京・旧滝野川区の大地主の分家・つまり小地主の出身で、大正生まれの大正育ちであるが、「美人でないと恋愛結婚はできない」と、娘時代に思っていた。

たは健康であるか、その他、が重要となる。男性の場合、自分で生活して行くわけだから、女性に経済力があるかどうかは、概して問題ではない。もちろん健康か、性質がよいか、などの要素は少しは重要となる。だがむしろ女性の個人的資質が評価される。男性の方は、個人的資質に加えて社会的・経済的資質も一緒に評価される。仮に女性が美人か不美人か、男性がハンサムかそうでないかという問題は、女性の側において大きい要素となり、つまり重要となるし、男性の側では小さい要素となる、つまり重要ではなくなる。

ついで第3に、社会的問題である。戦前はその上に、家父長制度により、見合い結婚が多かった。結婚は家の問題であった。家と家の結婚であって、個人の問題ではなかった。

以上の3つの条件と、一般的に男性が普通にもつ観念と、それから多喜二独特の思いが重なって、彼は美人に弱かった。

尤も誰でも美人好きといっても、自分の好みの美人なのであって、世間一般の観念でいう美人とは、それは微妙に違う。本人の好み、本人の美意識を中心としたものである。その上にまた、美人像は、時代によって違うのである。

タキは、当時の世間一般でいう美人であった。そして我々には、はっきりした写真では1枚しか見られないが（写真集⁽¹³⁾）、それによればやはり美人である。その写真は、やまき屋時代ではなさそうであり、また恐らく20代であろう。彼女は恐らく大正美人である。現在でも通じる美人だが、特に大正時代の男性に好まれたであろう。大正時代の美人は、概して、竹下夢二の描く女性が理想の美人とされたようである。

多喜二は後年になってその女性観を変えていったであろうと、島田氏は書いているし、小生にも語った。だが私は、余り変わったとは思えない。もちろん多喜二が若いときの小樽時代に抱いていた女性観は、現在から見てあま

(13) 手塚編『写真集 小林多喜二——文学とその生涯——』新日本出版社1977年。

り立派なものではない。とって非難される筋合いのものでもない。

さて多喜二は、何も女を買おうとしてここヤマキ屋に出かけたのではなく、友人に言われて、どんな女性かと見に行ったにすぎない。手塚は「人生探求的な好奇心からでかけたのであったが、田口タキは彼に深い印象をきざみつけた」と、上品に書いている。実際はそんな上品なものではなく、多喜二が美人好きだったので、好奇心から出かけたのであり、また会ったタキが、言われていたように大変な美人であったので、一目惚れをしたのである。

武田暹は、この点で微妙な違いを記している。そして手塚説にかなり近い。「多喜二の家はこの山ノ手とは方角がまるで違っていた。小樽築港に近い若竹町にあって、彼はその築港駅から毎日汽車に乗って、通勤していた。[彼は]また同人雑誌『クラルテ』に小説を書いている真面目な青年で、酒や煙草はもちろん、あやしげなのれんをくぐるような遊びは知るはずもなかった。たいていの文学青年がそうであるように、この闇の世界に異常な好奇心だけはもっていたが、自分からすすんでそこに足を踏み入れるだけの神経の太さはなかった。」これは、かなり多喜二を理想化している。ヤマキ屋は、しかし、銀行から歩いて帰るならば、ほとんど途中である。

「多喜二が瀧子を知ったのは、商業学校時代の二、三の友人たちのてびきであった。「やまき屋」に小林好みのすばらしい美人がいるぜ、といわれた。闇に咲く見知らぬ女にそこはかたなく胸をときめかせたが、ひとりで乗り込む勇気もなく、それらの友達にまじりこんで、「やまき屋」の瀧子に通うようになった。」⁽¹⁴⁾しかし、武田の想像とは違って、伝記や映画のそれとは違って、多喜二は一人で乗り込んだ。

3 小樽の遊里

港町には遊里が発生する。ヨーロッパで言えば、有名な所では、ハンブル

(14) 中津川俊六 [武田]「小林多喜二の恋」(『婦人公論』1949年1月)

グやアムステルダムである。レーパー・バーンや「飾り窓」である。長い間女性なしで暮らす船員たちは、上陸して女を求めるからである。そして小樽は港町である。また出稼ぎ人の多く集まるところには、彼らを相手にする遊里が発生する。小樽には漁場があり、そこに小樽人が集まった。かれらは単身で北海道にきていた。

さて小樽には、遊廓として南廓と北廓があった。南廓は、住之江町の中心街から入船町奥地の一帯⁽¹⁵⁾、あるいは松ヶ枝町あたりであった。そこには大門があった。おいらんも居た。大門のそばに、交番があった。代金を踏み倒す逃亡者を捕まえるためであった。南廓は明治29年以來のものであった。北廓は、手宮にあった。明治40年にこの遊廓が新設された。今の北生病院のあたりである。女性の写真を並べて、客はそれを見て入るのである。

大正5年に小樽の娼婦は、入船79名、手宮96名、計175名であった。

小樽ではそれら以外に、信香(のぶか)という区域があった。遊廓ではないが、半売春地域であり、有名なものが東楼⁽¹⁶⁾である。銘酒屋、蕎麦屋であった。女郎屋の代表建築である。これら以外にも、蕎麦屋、銘酒屋があった。

またそれ以外に小樽では、トウチク、ニッチク⁽¹⁷⁾という、簡易売春街があった。安く遊べたのである。

「小樽には……六千人以上と推定される私娼がいる。市の北と南に以前あった遊廓……六千人の私娼は、ゴケ屋またはソバ屋というのに住みついているほかに、全市の各所に横行し、船員や旅人や土地の男たちを客としている。この六千人は、この町の出身というよりは、付近の町村のものが多く、大体この町に同数の極貧家庭があることを暗示する……」⁽¹⁸⁾

(15) 小寺平吉『北海道遊里史考』北書房 1974年。

(16) 現在の「三ます」。この町には現在、土蔵作りの家が2軒ある。木骨石造は安い。そのうえ石を張っている。

(17) ニッチクは、今の北海道新聞小樽支店の横から海側へ下った道である。

日本蓄音機、東京蓄音機があったからだという説がある。

(18) 『伊藤整全集』新潮社 第23巻 昭和51年 376ページ。

売春制度は、人類の歴史とともに古い。そしてこれはブルジョア資本主義制度とともに一層発展する⁽¹⁹⁾。

4 田口瀧子

田口の父は、道南森町尾白内村出身の玉蔵である。漁師の次男だった。母は秋田県由利郡小友村出身のキクノで、伯母を頼って小樽へ渡ってきた。田口タキは、1908年5月、小樽郊外の高島という海岸沿いの漁師町で生まれた。色内町生まれという説もある。多喜二より5歳下であった。手塚は、「父はその土地で蕎麦を売り歩いて」と、書いた。しかし実際は違う。彼は、蕎麦の意味を間違った。

両親は、大正末期、小樽の北隣の漁村高島村で、「泉」という、いわゆる“そば屋”をやっていた。いわゆる半売春である。2階建てのかなり大きな構えだった。店には下働きの者と酌婦との両方を置いていた。父は新しい酌婦が入ると、必ず一度は手をつけたらしく、そんなときは、母はヒステリーを起こして何日も機嫌が悪かった。当時10代だったタキも、炉端に座っているところへ玉蔵が入ってきてどっかと腰を下ろしたりすると、ふと父親というよりも男を感じさせられた。

間口2、3間の正真正銘のそば屋から、夫婦協力して折角店を大きくしたのに、わずか数年後には転落した⁽²⁰⁾。

両親は、たくさんの家族を養っていた。田口の家は、上6人が女、下2人が男の8人姉弟であり⁽²¹⁾、タキが一番上だった。その下の妹がミツ、そしてシズエがいる。駿（大正12年生まれ）が1番下であり、駿とタキは、16歳も年がひらいていた。滝は高島小学校ではクラスで1番成績がよかった。

(19) 売春制度については、ベーベル『婦人論』(Die Frau und der Sozialismus.)が論じている。訳、大月書店、上下。研究、拙書『ベーベルと婦人論』成文社。

(20) 宮野駿「田口タキ」(『北方文芸』171号)。

(21) 瀧子のきょうだいは、少なくとも6人はいた、と三吾氏夫人は語る。しかし少なくとも8人だった。

小樽手宮西尋常高等小学校を、1番か2番かで、卒業した⁽²²⁾。

瀧子の一家は、高島にあって、長女の瀧子が小学校を出る頃までそこに住んでいたが、彼女が15歳（古い数え方）の暮れ、父が新たに初めた商売に失敗した結果、どうにもならなくなった田口の一家は、ひどい吹雪のある夜、高島をひそかに夜逃げをして、函館に近い父の郷里の森町の親戚をたよって行った。だが、そこで生活の道は立たなかった。彼女をかしらに5人の妹と2人の弟をかかえた十人家族は、貧窮のどん底におちいった。1922年1月末、父親から手伝いに行ってくれるようにと頼まれて、何も知らない彼女は、室蘭の銘酒屋へ売られて行った。

「長姉は母親にだまされるような格好で、苦界に身を沈めることになる。」と宮野は書くが、今述べたように、父親によって売られたとも考えられる。

娘を売ったわずかな金で、田口の一家は、函館から小樽・長橋の場末にうつった。父親は、日雇いにでて、その日暮しをしのいでいたが、大正12月中旬、生活に疲れはてた彼は、多喜二の家に近い若竹町の踏切で鉄道自殺をした、あるいは大正12年、駿が生まれた年の暮れに、借金を残して父が鉄道事故で死んだ。彼の死は、自殺か事故か不明である⁽²³⁾。この鉄道自殺については、後でタキは多喜二に語った。

父親の鉄道自殺は、家庭に宿命的な暗い陰を投げた。田口の長屋では、父親の葬式の最中、より合った親戚の人たちの相談で、こども8人のうち、瀧の幼い4人の弟妹たちはそれぞれ他家へ貰われていった。この話も多喜二は後に小説にした。

駿は、生後9カ月でもらわれていった。養家は、経済的には平均並か、むしろそれ以下ぐらいの小さな洋物店だった。養父は昭和5年に33歳で亡くなり、その後、駿は、養母や、時には祖父母の手で育てられた。昭和15年、彼が17歳になるまで、自分の秘密を全く知らずに育った。それに養家と実

(22) 宮野「A君への手紙」（『北方文芸』1968年3月）。

(23) 宮野「A君への手紙」80ページ。

家がほとんど没交渉だった。

取り残された瀧子の母親は、妹の美津子、長男、5女を抱えて生活の道を絶たれ、まもなく小樽の稲穂町に移って、第2の父を迎えた。彼は日雇い労働者であった。義父は定職を持たない、市井の無頼の徒であった。そしてなお、この結婚で異父妹が1人生まれた。

タキが室蘭から、小樽入船町のやまき屋へ転売されたのは、父親の死後4カ月目であった。数えて17歳であった。義父は、瀧子の身体を「やまき屋」に売るような男であった。だから彼女が売られたのは、貧乏のせいばかりではなく、理不尽な義父のふるまいがたたったからでもあった。

小樽で蕎麦屋といえば、その大半は酌婦をおく淫売窟を意味していた。抱え女は三、四人いて、客の求めに応じて二階の汚らしい小部屋で、二円、三円という半襟一本のはした金で春をひさぐのであった⁽²⁴⁾。

5 タキあて手紙

多喜二は、田口タキに会いに、度々やまき屋を訪れた。彼は一人で行った。タキと知り合って半年後の1925年3月の手紙で、「闇があるから光がある」という出だしの、有名な手紙を書き送った。どれかの小説の中にあった言葉である。しかしこれは暗い生活をしていない人が書ける文句だった。

「僕は学校を出てからまだ二年しかならない、だから金も別にない。滝ちゃんを一日も早く出してやりたいと思っても、ただそれは思うだけのことでしかないんだ。これはこの前の晩お話した通りだ。然し僕は本当にこの強い愛をもっている。……いつかこの愛で完全に滝ちゃんを救って見せる。……」⁽²⁵⁾ 文字通りこれは、ただ思うだけでしかなかった。というのは、この手紙の三週間後、多喜二はひそかに上京して、東京商科大学の入学試験を受

(24) 夏堀正元『小樽の反逆』岩波書店 97ページ。

(25) 『小林多喜二全集』新日本出版社(以下『全集』と略)、第7巻 334-336ページ。

けているからだ。だからこのとき多喜二は、これを真剣に書いたのではなかった。一種の、責任のないラブレターである。もしも東京に出ていったら、瀧子のことをどうにもしようがないのだ。

この手紙にたいしてタキはすぐ返事を書いた。そして多喜二はまた、本を手紙とともに送った。

6 東京商大受験

銀行で多喜二と同僚の中橋さんは、多喜二が「入社して一年もたってから」、多喜二が、友達で東京に行けるような人があって羨ましい、というようなことも言った、と思い出している⁽²⁶⁾。

嶋田は書く。多喜二が銀行に入って1年くらい経ったころ、多喜二、嶋田正策、斉藤次郎の三人が、札幌へ出て、夕方帰りに北一条にある拓銀の重役の所へ寄り、島田と斉藤は外に待っていて、多喜二1人、塀のある大きな邸宅に入り、しばらくして出てきた。東京支店詰めを頼んだのであった⁽²⁷⁾。

この話は、昭和2年に多喜二が同じことをしているので、嶋田が年を記憶違いしたかもしれない。

だが、ついに東京勤務は実現せず、そのうちに小林は街を歩きながら英語の本を読み始めた。あまり珍しい事なので、何かあるんだなと嶋田は思った。受験ではないかと思って訊くと、やはり東京高商の専科を受けるつもりだった⁽²⁸⁾。

同じことを嶋田は書く。大正14年、嶋田が南小樽駅のすぐ近くに住んでいて、勤め先が多喜二の銀行と向い合っていたので、毎朝、小樽築港駅から来る多喜二と待合わせて出勤したが、道々何か読んでいるので尋ねると、東京商科大学を受験するので英語をやっているのだという答え。多喜二は実は

(26) 佐藤静夫稿、『文化評論』387号。

(27) 島田正策（『緑丘』42）。

(28) 同。

東京で作家になろうと考えていたのである⁽²⁹⁾。

多喜二は、東京へ出て勉強したいと思う。一九二五年春、東京商大の入学試験を受けた。志願者は二倍くらいあった。翌年、伊藤整が東京商大を受験したのだが、その時の試験科目は、語学（英仏独の一国語選択）と数学又は簿記、それに民法総論、論文、経済学であった⁽³⁰⁾。

桶谷は言う。小林多喜二が東京商大を受けた「その動機は、これもよくわからないところがあり、文学をやるために上京する口実をつくるのが、受験の動機だったという説もある。しかし多喜二には、社会科学をさらに勉強したいという動機があった。そう推測してもおかしくないところがある。」⁽³¹⁾だが、実際は、文学をやるためだった。

だが不合格になった。

姉・チマは言う。多喜二は、「受験に失敗したから安心してくれと、母に電報よこしたというんですよ。もしも入学したら、学費が大変だ、心配するだろうと思ってたんですね。それを聞いた時、ほんとに多喜二らしいなと思いました。

私がほんとに恵まれていて、佐藤へ嫁いだものですから、万一、自分がどんなことになっても、母は姉のところへ行くから安心だと思ってたんでしょね。」⁽³²⁾

小樽高商の教授だった大熊信行は、大正12年の6月に、米沢に帰り、大正13年10月、茅ヶ崎の南湖院に入院し、丸半年のサナトリウムの生活をした。大正14年3月には、多喜二は上京のついでに、つまり受験のついでに、神奈川県茅ヶ崎に足をのぼし、南湖院に療養中の旧師大熊信行を見舞った。見まい客などはほとんどない時代だった。上京の目的は東京商大受験であっ

(29) 島田の稿、『小林多喜二全集』月報2。

(30) 桶谷秀昭『伊藤整』新潮社 1994年。

(31) 桶谷秀昭 69-70 ページ。

(32) 『北方文芸』1968年3月 55 ページ。

たが、それを大熊には語らなかつた。病室の白い壁を、うしろ手にして立ったまま、例の終始ニコニコした顔だった。それが大熊とは最後となつた⁽³³⁾。

多喜二はしかし受験で上京して帰って来ると、芝居の話を皆にする。山本有三「同志の人々」で、[市川] 猿之助が主演したものと思える。彼がそういう話をする時、先ず天下逸品といたい程上手で、役者のしぐさや台詞をこまかく、手に取るように話し出す。皆は神妙に聞いていた。

拓銀入社当時は多喜二は余程東京に出て文学を勉強したかつたらしいが、東京行きの計画が失敗しても、特別くじけた様子もなく、何時もと変わらない様子だった。

1925年、大月源二が美校 [=東京美術学校] 四年の夏休みに小樽に帰り、色内町の鉄道線路ぎわの彼の義兄の佐藤家で、油絵「製罐工場と若者」を描いていた時、多喜二が訪ねてくれた⁽³⁴⁾。多喜二が受験に失敗した夏のことである。大月源二と多喜二とは、だからすでに親しかつたらしい。

桶谷は、面白いことを言う。多喜二が東京商大に合格し、「そしてもし入学していたら、別の生涯を送つたかもしれない。たとえば、その頃、ドイツ留学から帰り、近代経済学からマルクス経済学へ移つた大塚金之助⁽³⁵⁾——彼はまたアララギ派の歌人であつた——のゼミナリストになり、小説をかくことをやめていたかもしれない。」⁽³⁶⁾ 小樽高商で、多喜二の2年先輩の土田秀雄も、大塚金之助のゼミナールに入った。もし多喜二が東京商大に合格していたら、土田のように、大塚金之助のゼミに入つただろう。というのは、大塚金之助は多喜二が卒業した年に、欧州留学から帰国した。学部でゼミを

(33) 大熊信行『文学的回想』第三文明社。

(34) 大月源二「多喜二と私」(『北方文芸』1968年3月) 87ページ。

(35) 大塚金之助(1892-1977)。東京生まれ、神戸高商を出て、東京高商に学ぶ。福田徳三のゼミに入る。1924年に、東京商科大学助教授兼専門部教授。32歳だった。

(36) 桶谷秀昭『伊藤整』69-70ページ。

もっていたが、専門部でもっていたとは記録されていないので、分からない⁽³⁷⁾。もちろん専門部生も入れたのだろう。ただし、多喜二が文学をやめることはなかっただろう。

7 瀧子を救う

多喜二は初め、瀧子の美貌にひかれて「やまき屋」ののれんをくぐっているうち、現在の生活から一步踏み出そうとあがいている、もだえ苦しんでいる、まっとうな彼女の一面に触れた。そして彼女の美貌が彼をとらえて離さなかったように、彼女の苦しみ、悩み、訴えも、なお一層彼をとらえて離さないものとなった⁽³⁸⁾。

多喜二は、田口瀧子が自分と名前が「たき」の部分で同じことを発見し、2人が運命的に結ばれるのかも知れない、と瀧子に話した。

「多喜二は「やまき屋」に普通の客のようにして瀧子と何回となく会っていたが、一度も彼女に肉体の要求をしなかった。」⁽³⁹⁾ 女性関係について、多喜二と伊藤整は全く正反対である。

田口タキを身請けする前に、多喜二は「びっくりすることをするぞ」と言っていた。彼はそれまで口ぐせのように「俺のワイフは女子大出だ」と、冗談とも本当ともつかぬ様なことを言っていた⁽⁴⁰⁾。

嶋田は言う。彼はしばしば「俺は女子大出を嫁さんにもらうんだ」といつて「妻をめとらば才たけて……」と歌ったりしていたが、たいていの男性がそうであるように、何処かに美人がいると、すぐPRをはじめた。決してかくして置くことがなかった。ただし、銀行の女性同僚・中橋さんは、多喜二がタキとつきあっていることを知らなかった。それに、嶋田の言明とは違っ

(37) 『大塚金之助著作集』第10巻 岩波書店 1981年、509ページ。

(38) 中津川俊六 [武田暹] 「小林多喜二の恋」(『婦人公論』1949年1月)。

(39) 同 (武田)。

(40) 嶋田、拙稿『嶋田正策小伝』。

て、多喜二はタキの存在については、親友には言ったかもしれないが、友人にあまり吹聴しなかったのではないかと、私は思う。嶋田も多喜二と一緒にやまき屋に行ったことはないらしい。嶋田は興味があつて、多喜二が訪れない時に一人でやまき屋に行ったことがある。

嶋田は言う。小林の女性観は恐らく晩年ころには確立されていたと思うが、「年に一三回血を流す冷血動物」というのがある。彼がストリンドベリイを勉強していた頃聞いた警句である⁽⁴¹⁾。

宮野の直談によると、姉はとにかく美人だった。多喜二は第一に女としての姉に惹かれた⁽⁴²⁾。

滝は、「不幸にひしがれた内攻的なつつましさのなかに、のろわれた生活から逃れようとする必死の願いをひめていた。」⁽⁴³⁾と、手塚は書く。夏堀はこう書く。「このときの田口タキは一六歳、色白の瓜実顔で、切れ長の大きな眼に憂いをみせた、鼻筋のとおった美少女であった。だが、入船町の蕎麦屋やまき屋の酌婦をしていた少女の身体は、すでに多くの男どもに弄ばれていた。」⁽⁴⁴⁾「多喜二は若くして春を売っているこの美少女を知り、その不幸な境遇に衝撃をうけて、深い同情をよせ、やがて彼女を苦界から救い出そうと決意した。」しかし、ここで夏堀はおそらくフィクションを入れる。「が、タキは差しのばした多喜二の手を振りほどき、酒を飲んで泥亀のように酔い、半襟一本で男と寝る生活にしがみつこうとした。自棄に馴れた彼女は、自分を変えることが怖かったのかもしれない。／多喜二はあせり、タキを叱り、叱っては愛し……ついに……救い出した」⁽⁴⁵⁾。私はとりわけ手塚伝記を墨守する気は毛頭ないのだが、夏堀氏はこの重要な指摘をするための材料があるのだろうか。解放されようと思つてお金を貯めているタキには、この状

(41) 島田正策の稿、『緑丘』42。

(42) 小笠原講演。

(43) 手塚，新日本新書，上，1974年，101ページ。

(44) 夏堀，97ページ。

(45) 同，98ページ。

況はふさわしくない。おそらく、手塚説と夏堀説の中間あたりに真実はあるのではないか。

1925年7月14日、多喜二はヤマキ屋へ行って「sleep」⁽⁴⁶⁾した。これはおそらく一晩泊まってきたのであろう。瀧子と長くお喋りして、しかし肉体交渉はなしに。

1925年の秋、多喜二は、タキが一日も早く自由の身になりたいと思って、少しずつ、血のにじむような金をつみたてていることを知ると、つよく心を打つものを感じた。

だが多喜二が実際にタキを救いだそうと考えたのは、年が巡って翌年、1926年の1月であろう。「一緒に生活しよう」という言葉のある手紙を1月13日に書いている。タキは、盆と正月の年2回、藪入らしいものがあった。

「多喜二は瀧子から聞いた。前借りは500円近いが、その半分以上は自分が今までに貯金しているから、あとの半分だけ都合がつけば、今すぐにも「やまき屋」から自由に出ることができる、と。小林は心底から有頂天になった。200円くらいならなんとか工面ができないでもあるまい。

だが、200円といえば、当時の彼の月給の3倍ちかい大金だった。母や弟妹たちは彼の月給を頼りにほそぼそと暮らしているから、家には余分の金があるはずもない。先輩・知人をみわたしても、使途が使途だから、誰にでも相談するわけにもゆかない。つまり、2人の関係を知っている友人よりほかはない。しかし、みんな学校を出たばかりで、多喜二同様、金には無力だった。」⁽⁴⁷⁾

蒔田栄一は、東京外語の英語部を卒業して、高商に赴任してきた。庁商の多喜二の同期生である。彼が小樽に来たときに、ちょうど多喜二は卒業していた。

蒔田は、色内町の拓銀小樽支店にチョクチョク多喜二を訪ねていった。多

(46) 日記（『全集』第7巻）129ページ。

(47) 中津川俊六〔武田暹〕「小林多喜二の恋」（『婦人公論』1949年1月）。

喜二の同僚中橋さんも言う。拓銀の玄関を入った脇に大きな大理石の柱があり、休み時間などに『クラルテ』のお友達でしょうか、多喜二を訪れてきて、その柱の向こうでお話をしているのが、中橋の机が直ぐその傍だったので、よく聞こえた⁽⁴⁸⁾。

ある時、蒔田は、多喜二に呼ばれて妙見山（水天宮であろう）の神社の境内で逢った。「五百円貸してくれないか」という相談であった。田口滝子を魔窟から救出する金であった。高商の教師になりたての蒔田には、そんな大金が調達できる当てもなかったもので、断わった。多喜二が500円貸してくれというのも大袈裟ではなかろうか。

さて結論的に言って、この金を貸したのは、親友の嶋田正策である。

武田暹は、こう言っている。嶋田は、「小樽商業（＝庁商）を出るとすぐに三菱に勤めて4、5年たっていた。だから、友人のなかで彼だけがまとまった貯金を持っていた。そこで嶋田は多喜二と瀧子のためにそのなけなしの貯金をはたいたのであった。貸したのである。」⁽⁴⁹⁾

手塚は書いている、「嶋田は商業をでて5年間の貯金の大半をはたいて200円の金を貸してくれた」⁽⁵⁰⁾。

しかし細かく言うと、2人とも間違いである。本人の嶋田は私にこう言っている。

タキの身請けのときの金（＝500円、タキはその半分は貯めていた）は、多喜二が初め蒔田栄一（当時、小樽高商の英語の専任講師）に頼んで断られた。その後、多喜二は嶋田正策氏に頼んだ。だがその時、蒔田に頼んだことを多喜二は正策に言っていない。多喜二に借金を頼まれたころ、ちょうど正策にはボーナスが出た。それは月給の3カ月以上であった。ちなみに初任給は34円であった。ボーナスは200余円であった。この200円を多喜二に貸

(48) 『文化評論』113ページ。

(49) 武田。

(50) 手塚、112ページ。

したのである。

残りのお金のことは、多喜二は「まあ何とかなるさ」と言っていた。

多喜二は「母に、不幸な生活に苦しんでいる田口を救い出すために年末賞与の全額を使うことを頼んだ。」⁽⁵¹⁾と云われている。「母は快く承諾してくれた。」

しかしこれはそうならなかったはずである。500円のうちタキが250円貯めていたとして、200円を嶋田から借りたとすると、多喜二は50円出した勘定である。多喜二の給料は88円であり、年末賞与が仮に3倍出たとすれば、250円になる。だから出したとしても年末賞与の一部にすぎないだろう。ただし、ボーナスが月給と同じくらいだったら、苦しかったであろう。

だから手塚説が正しいとすると、多喜二の母への発言は、嶋田が貸してくれることになる以前の話か、ボーナスが多くなかった場合であろう。

貸した金のうち多喜二は50円だけ返した。嶋田氏は、はっきりしないが多分、間もなくであったと思うと言う。だがその後はとうとう残りを返してもらっていない。つまり差し引き150円は多喜二が返していない勘定になる。多喜二は銀行を止めたとき、月給が110円であった。嶋田正策氏はこの頃60～70円であった。多喜二が150円を返していないことについて、嶋田さんは、少しもうらみがましいことを私に言っていないし、気にもしていない。2人は親友なのだ。

一九二五年、多喜二はタキを救い出した。12月もおしつまって根雪がふかくなったころ、「やまき屋」から救い出された田口は、いったん義父の家にひきとられたが、2カ月後、多喜二はタキを、奥沢の、ある家の二階を借りて、そこに移り住むことになった。嶋田がその家を紹介した。

こうしたのは、多喜二の考えであった。実は、瀧子を実家に帰したら、再び義父が瀧子を売る可能性が強かったからである。多喜二は彼女の生活費も

(51) 手塚, 112 ページ。

出していた。この借間の時代に、多喜二は「やろうと思ったがしなかった」と嶋田氏に言った。病気のことではないかと、嶋田氏は推測している。

しかしこの奥沢で瀧子が借間住まいをする生活は、2、3カ月とは続かなかった。瀧子が別に生計の道をたてないかぎり、多喜二の月給の一部分だけではとても食べてゆけなかった。「その上、多喜二が女を囲っていることが家にも知られ」と武田は書くが、それは違う。もちろん多喜二は彼女を「囲った」わけではない、また多喜二は母にそれをすでに話しているはずである。母は心配して、そんな不潔なことをせずに家に引き取ったら良かろうに、といった、とされる。

武田暹は、こう推測している。

母は女だけに、瀧子を家に入れることを何べんも考え直しただろう。世間から白首（ごけ）とか淫売婦とかとさげすまれるような商売女に、多喜二がどうして気持ちがうごいたのであろうか。親として、狂気の沙汰としか受け取れなかったから、母の心痛は想像のほかであった。しかし母は、いちおうはそう思いながらも、心の底では多喜二をどこまでも信じてうたがわなかった。いままで二四年の間、親の目から見て、これという間違いらしい間違いをおかしたことはなかったのだ。今度のことも、きっと多喜二は正しいと考えてやったことに違いない。それがどういう風に正しいのか、はっきりのみこめないが、家に引き取ってやれよと、母は何気なくそういって、奥沢の貸間から瀧子を自分のそばに呼び寄せるだけの勇氣を持つことができた⁽⁵²⁾。

タキを家に連れて来るということは、「別に大変でもなかった……誰も反対しなかった。いいことなんだし、母もむしろよろこんでたらしいです……」とチマ。チマは言う。「正しいことをしたんだから、と母がいつてましたね。ボーナスもあのときは持ってこられなくて、楽でない生活でしたけど。」「タキちゃんは、いい人でした」と、チマ⁽⁵³⁾。嶋田も言う。「人柄がよ

(52) 中津川。

(53) 『北方文芸』1968年3月

かったからね、タキさんは」。

滝が家に来た。母セキは赤飯を炊いて祝った。黒のワンピース⁽⁵⁴⁾を着て、綺麗な人だった、という。妹の幸が、そこにいた友達に、この人が兄のお嫁さんになる人だ、と語った。友達はやった。「あの立派な兄さんが!？」⁽⁵⁵⁾小樽高商を出て、小樽一流の銀行員である人物が、下界の女性を身請けするなんて、という世間一般の思いである。

この多喜二は、タキを自由にしてやりながら指一本振れなかった（小笠原）とされる。指一本ふれなかったとは、大袈裟であって、それは文学的表現である。2人はキスしたり、抱擁しあった。だがセックスをしなかったらしい。その意味である。

8 タキとの生活

多喜二はタキをどうして救ったのか。まずさしあたりの理由は、タキが素晴らしい美人であったからである。もちろん性質のよさ、などの点も、付随的にはあった。1人の女性としてのタキが惨めな境遇にいるから救ったというのではない。ある女性が半売春の境遇にいても、誰も救おうとは思えない。なにしろそういう女性は多くいるからである。多喜二が救う対象としてタキを選んだのは、やはり特別な理由がなければならない。

家に連れて来る時に、多喜二はタキに、近い将来結婚しようということを行ったか、ほのめかしたかしたと、推測できる。

一方、タキは、多喜二をどう思っていたのだろうか。真実は分からない。後年、タキは、多喜二を全身全霊で愛した、と言ったが。タキとしては、多喜二が社会的にも小樽では立派な人物であり、道徳・倫理的にも悪い人ではないし、決定的には、自分を救ってくれた、いわば「人生の恩人」であるから、感謝の念が強かっただろう。それもひととおりの感謝ではない。

(54) ワンピース、のこと。

(55) 仁木さん。

タキが小林家に住んだ。ところが実際に一緒になって見ると、小林の母・セキは、しんから瀧子が気に入ってしまった。顔や形が美しいばかりではない。内気で従順な、それでいて、しゃんとした強い意志をどこかにかくしているような彼女であった。商売女が誰でも持っている一種特別な性格のくずれは、世間を長く渡ってきた母の目にも、それとうつらなかつた⁽⁵⁶⁾。

多喜二の母は、瀧子を、多喜二の嫁というよりも、自分のそばから離れたくないような、自分の娘にでもしたいような切実な気持ちを抱いた。

それは、武田の推測によると、瀧子の非情とも思われる境遇のせいだった。たとえ彼女が「やまき屋」から自由になっても、家に帰れば、またもや義父の手にかかって、第2の「やまき屋」に売られるのは必定の運命だった。小林の母が彼女を自分のそばから離したがるのも無理ではなかつた。

だが不思議なのは、多喜二と瀧子の身体の関係であつた。彼らは夫婦の関係を結ばなかつた。家の中が狭くて、2人は弟妹たちと一緒に枕を並べて寝なければならなかつた。だから夫婦の関係が結ばれないと考えるのは、皮相な観察である。また2人は正式に結婚したわけではなく、瀧子の親たちの承諾も得ていないからというのも、その理由にはならない。多喜二が青年らしい正義感で彼女を苦界から救いだしたとしても、彼女が好きであつたからである。好きなら好きで、1つ屋根の下で起居しているのであるから、どんな機会をとらえても、2人の肉体が結ばれないはずはないのである。母からすれば、まして瀧子は商売上がりで、生娘ではないはずであるのに。母は、あまりにも淡泊すぎる2人の関係が不思議であつた。そしてこれを理解できなかつた。

いま、世間的に言えば、瀧子を「身請け」して、同棲生活をしているのに、別にそれらしい素振りが無い。ない、というよりも、あえてそれを拒ん

(56) 中津川。

でいるように見える。どうしてであろうか。

多喜二にしてみれば、結婚とは単に肉体の占有だけを意味していない、と考える。彼女を完全に自分のものにするには、つまり自分の描く理想の妻とするためには、彼女を教育することが、結婚の欠かせない前提となっていた。この青年はいくつ考えで、たとえ一時的にせよ、結婚までは、肉体の欲望をしりぞける自己抑制が必要であった。

その上もう1つの理由があった。

瀧子は色々な男性を肉体的に知っている。それは彼女のやむをえない境遇のせいであり、彼女の自由意志ではない。その境遇に同情したことが愛情と正義感をうんだのだが、今度は彼女を自分のものとして独占してみると、彼女にまつわる過去の男性たちが、あたかも彼女の不純・不貞操のせいのように思われてくるのであった。そして彼女に肉体を要求することが、彼女の知っている過去の男たちと、行為においてはちっとも変わっていないと思えるのであったし、彼女の不純・不貞操をそのまま自分も認めてしまいそんな錯覚におちいるのであった。この不思議な倒錯心理を断ち切るには、それらの男性と自分とを行動の上ではっきりと区別しないではいられなかった。こうして多喜二は、また禁欲的にならざるをえなかった。

私はその上に、多喜二が性病を心配したのだと、考える。

おかしいことに、瀧子と生活を始めるころ、一時、多喜二は、瀧子の妹の美しさに参ったことがある。タキの妹・美津子は、タキより美人だった。多喜二は、初めこの妹を見て、瀧子より美しいので、損をしたと思った。多喜二はタキが美人だから、救ったのであり、結婚をも考えた。しかし、その観点から言うと、より美人の妹の方がよいのである。タキを救い出してから、弟妹にあうことになったので、それまで多喜二は妹を知らなかったのである。おかしいことに、多喜二は数日悩んだ。しかし、そうも言っていられない。理由はわからないが、彼は解決した。

1926年5月、多喜二は、タキの手紙の箱の中に、他の男からの手紙を見て、疑惑を抱いた。それは何日か続いた。多喜二が瀧子を抱擁するそのうし

ろに、多喜二はその男が見えた。多喜二は、苦しかった。瀧がその男を思っているのではないかと考えたからである。5月25日の夜、多喜二は瀧とこの話をした。瀧は、「公明正大な態度で」、多喜二は救われた。多喜二の疑惑には何等根拠がなかった。瀧は、「今までのお客が、どんな手紙を寄こそうと、決してうそを書けないことから、返事をやらなかった」と言うのを、多喜二は信じた⁽⁵⁷⁾。

多喜二には一方的に自分の我を通そうととする態度があった。それは文学であり、文学への情熱であった。

多喜二は、同人雑誌「クラルテ」そしていくつかの雑誌に、多くの小説をかいていた。地方の文学仲間からは、彼の文学的力量は十分認められていた。しかしそれくらいの反応で彼の文学的情熱が満足されるはずがなかった。才能ある文学青年と同じように、彼も作家志望を捨てることはできなかった。作家を志しているのに、地方に留まっているのは愚かであった。一時でも早く、彼は東京へ出たかった。

このころ多喜二は、作家の新井紀一に、東京の就職口を頼んでいた。

新井紀一は、初期プロレタリア作家である。1890年(明治23年)2月に、群馬県で生まれ、小学校を卒業後、17歳のときから十年間、東京砲兵工廠の小銃製造所で銃身の矯正工として働いた。そのあいだ2年間、高崎歩兵連隊に入営した。1918年(大正7年)2月、待遇改善運動の先頭に立ち、憲兵隊に検挙された。工廠を追われたのち、春陽堂につとめ、水守亀之助のもとで『中央文学』の編集をした。これは投書雑誌であって、多喜二がそこに詩の投稿をしていたのだった。新井は小川未明に師事し、雑誌『黒煙』の同人になった。1920年7月から24年十月まで時事新報社の文芸部につとめた。

『早稲田文学』1921年8月の「怒れる高村軍曹」、『中央公論』1922年7月の「友を売る」が、代表作である。

(57) 『全集』第7巻、12ページ。

多喜二は、『クラルテ』に、新井の寄稿を頼み、その後も作品を送って批評を求めたりしていた。手紙も4通残っている。『中央文学』の編集者だったということかららしい。文学上の深い関連はなかったらしい⁽⁵⁸⁾⁽⁵⁹⁾。

東京へ出たがっている多喜二を見て、瀧子はどう思ったか。彼が東京に就職口が見つかって上京するとしたら、瀧子も一緒に東京へゆく、そこで晴れて結婚生活が始まるのだ。だがそれは暗黙の前提、であって、多喜二ははっきりと明言しない。なぜか口をにごらせて、曖昧にしている。

その上、経済状態があった。たとえ多喜二が拓銀から貰っているていどの月給を東京でえられても、東京の生活程度は高いから、2人の暮しはそれで精一杯にちがいない。とすれば小樽の母や弟・妹たちへの仕送りはとてもできなくなる。東京で小説を書けば、原稿料は入るが、定収入になるかどうかは分からない。

多喜二と一緒に瀧子を東京へ連れて行くのを躊躇しているのは、彼女に対する愛情が薄いからではなくて、そのような経済事情が許さないからであった。いや、多喜二はそう思い込んだ。実際は、東京に出て瀧子が働けば、何も心配する必要はない。しかし多喜二はそうは思っていなかった。瀧子はまた、多喜二に面と向かって不平や不満を言えなかった。反対に彼の東京行きを思いとどまらせることなど、とても彼女にできることではなかった。彼の激しい文学の勉強を毎日見ており、寝ても覚めても東京行きに執着している彼に接していると、むしろその願いを叶えさせたいと思うのであった。

そこで多喜二だけを東京に行かせたとしたらどうなるであろうか。彼女は正式に結婚していない。今のように家の手伝いくらいでは居候も同然である。結婚さえしていれば、何の気兼ねもなく、身を粉にして働きながら、留

(58) 『手塚英孝著作集』第2巻、新日本出版 1982年 396-400ページ。

(59) 新井は、1966年3月になくなった。本人の思い出として：「『黒煙』時代回顧」(『多喜二と百合子』1960・4月)；「雑誌『黒煙』時代の思い出」(『読書の友』1965・2・20と28)がある。

守を守れる。

瀧子は、なぜ結婚してくれないのかと思った。それを口に出して言えなかった。

多喜二は言っていた。「俺の妻となるためには、まだまだ勉強しなければならない。小学校も碌にでないうちに、ああいう社会で暮らしてきたんだから、無理もないけれど、それに甘えてそれっきり勉強から遠ざかったら、人間も屑だろう。俺のもとで、みっちり英語も習い、文学の本も読む。たまには啄木を手本にして歌も作ってみる。とにかく女学校ていどの学問や教養を身につけるよう努力しなければならない。結婚はそれからでも決しておそくはない。」瀧子は多喜二からいつもこう言われていた。

多喜二はまたこうも言っていた。「俺にしたって、いつまでも凡々として銀行員におさまっているつもりはないのだ。ここ2,3年で、文学をきつともものにしてみせる。偉いやつは、二十五、六で文壇に出ているんだからな。お互いにそれまでの辛抱なんだよ。」

「やまき屋」の生活は瀧子にとって地獄であった。だが多喜二の家での生活は、それに比べると天国であった。しかしそこでは瀧子の立場は何かあいまいであった。

問い合わせていた新井紀一から、東京は人が集まっていて就職はとても難しいと、返事がきた。

チマは言う。「向いに下駄屋があつて、母がタキちゃんの下駄を買いに行った。ところが一緒についていった妹が、あとでもう少し高い値段の下駄を注文し直した。……妹たちもほんとはよくしていた……。」⁽⁶⁰⁾

多喜二は、映画は三吾といっしょに行ったこともあるし、「きっとタキさんなどに行ったこともあるでしょう。」と三吾さん。

タキは、とてもきれいな人で、若竹町で評判になったほどだった。三吾の

(60) 『北方文芸』1968年3月 54ページ。

バイオリンの初舞台のときは徹夜で、かすりの着物を縫ってくれた。その頃は、かすりの着物に袴で弾くのだった。バイオリンだって、ケースではなく、風呂敷に包んでもっていった。

三吾さんは言う。波で海岸にうち上げられる木片なんかを、いっしょに拾いにいった。あれは水がしみているので重い。タキさんたちは細いのを集めて、大きいのはぼくが縄で背負って家まで運んだ。が、線路が何十本と並んでいる所を渡ってこなくてはならない。だから、危ないので、もういい、といっても、三吾がひろっている所へにこにこ笑いながら、やってくる。そういう人でした。店で売る餅を作る時もよく手伝っていた。

タキさんは、「昔 兄さんに逢えなかったとしたら 今の自分はどうなっていたか、考えると背筋が寒くなってくる」というように言っている⁽⁶¹⁾。

一緒に生活していても、2人はキスしたり抱擁したり、しただけだった。

1926年(大正15年)5月28日夜に、義兄の佐藤さんが来て、タキ子とのことをきいた、そして2人が約婚することをすすめた。多喜二は「ぼうぜん」とそれを承知した。義兄は、世間の噂のうるさいことを言った。多喜二が東京へ行くかもしれないことをいうと、もう4,5年待て、と言う、そしてら東京行きの方をひきうけるようにしてやるから、と言う⁽⁶²⁾。

この件について、瀧の弟・宮野は、もっと詳しく言う。

瀧子が結婚を申しこまれたのは、大正15年であって、タキ子が小林の家に同居している期間に一度あった、とタキ子は弟あて手紙で書いた。これが、そうなのであろう。

朝里の佐藤家に嫁いでいた姉のチマを、わざわざ若月の家——田口の母の再婚先、タキ子の実家——へ足を運ばせて、結婚を申し入れた。その時、タキ子は、自分は多喜二のような立派な将来性のある人にはふさわしくない人間だと考えて、折角の申し出だがそれを断わった、と言う⁽⁶³⁾。

(61) 小林三吾「兄の思い出」(『小林多喜二全集』第4巻月報4 1982年10月)

(62) 『全集』第7巻, 16ページ。

(63) 宮野駿「田口タキ」(『北方文芸』171号)。

6月1日の日記で、多喜二は書く。

自分の意識は何時も彼女の「顔」にこだわされてきた、そしてそのくせ、何時も女の本当の価値にあこがれているから面白い。男は女を選ぶのに、「偉いから」「しっかりしているから」「頭がいい」、「洗練されているから」「教養があるから」……そのいずれの点からでもない。たゞたった一つの点から——「美しいから、顔が」⁽⁶⁴⁾。

6月1日にまた書いている。「三、四日、彼女（＝瀧子）の働き振りは素晴らしい。Motherがその事を自分に云った、自分の事のように嬉しかった。……そしてこの上なお、ひまになれば彼女は自分が云った通り本も読んでくれる。従順だ。生意気でない、太陽でなくて、月だ。……」

6月7日、多喜二が『極光』へ出す原稿の反古を、滝子は読んだ。それは支那料理屋の女のこと、偶然にあった⁽⁶⁵⁾。それで滝子は参っていた。

それはこうだった。5月29日の夜、多喜二は、嶋田、斉藤と3人で飲む会をした。加賀屋バー、フナミヤ、音羽、支那料理屋、朝日屋、スズラン（＝鈴蘭）、の6軒を歩いた。多喜二がこれを提案したのだった。支那料理屋に綺麗な女が1人いた。3人で、酔ったので、ふざけ散らした。そうしながら多喜二は、タキのことを、そして彼女の元の生活を思った。その女に多喜二はモテた。そこでまた多喜二は、タキが色々な男におなじようにひかれたのではないかと思った。皆が帰る時、嶋田が「どうしたんだ？」というので、彼女が脇の下をくすぐったのだと、答えた。「君はもてたから、また来ればいいさ」と嶋田はいう。多喜二はこの件ですぐ瀧子のことを類推するのだった。瀧子もこういうことがあったのではないかと。

原稿の反古には、多分このようなことが、挿話として書かれていて、だか

(64) 第7巻 19 ページ。

(65) この作品は何かわからない。少なくともこの頃には、多喜二は『極光』に作品をだしていない。1年前、「龍介の経験」を出しているが、違う話である。支那料理屋の女の話は、多喜二の日記（18 ページ）に出て来る。

らタキは、すっかり悲観したのだろう。

この日、「俺は彼女の凡てを信じよう。彼女は信じうるに足る人間だから。」と日記に書いている。2人は話合って和解したのだろう。

しかし、すぐ次のようなことになる。

6月10日、多喜二がお湯 [= 銭湯] へ行って帰ってくると、滝子が昔きた手紙を調べていた。その中で、彼女が読んでいながらクチャクチャにしたのがあった。多喜二が取ってみると、室蘭にいたとき、1人の巡査から彼女に寄した Love letter だった。多喜二は又淋しくなった。

「自分はある所にいた彼女に、そういう色々なことがあったことを承知していた筈だ。それでも、自分の内心には、彼女を、普通の女であることをヒソカニ要求しているところがあった。(これは危険だ。)だから、彼女の生活、そういう男との交渉、…… etc.を考えると、心臓のあたりが変にくすぐったく感じられてくる。

(女はどうしてこう純潔でなければならないのだろう。どうして、男にその純潔が重大に要求されなければならないのだろう。)」と、多喜二は悩む。

問題にぶつかって多喜二は、瀬戸病院に産婦人科医長山下秀之助をたずねて、性についての意見をきくなど、真剣であった、とされる。山下秀之助は、歌人であって、多喜二は交際があったので、行ったのであろう。問題というのは、性病のことだと、小生は推測する。

6月11日の夜、瀧子がちょっとした事にたいして、多喜二に答えなかった為、とうとう多喜二が本気に怒ってしまった。いくら言ってもだまっている。一言もいわない。多喜二はその顔を見ていると、ムラムラとしてきた。

しかし瀧子は、多喜二が「どうした、ええ？ ええ」と聞いているうちに、どうしても言えなくなってしまった、と言った。

6月12日の朝3時ころ、多喜二が寝ていると誰か上がってくるようだった。夢からさめて見ると、滝子が座っていた。そして多喜二を見ていた。前の晩のことで、余程苦しんで眠れず、色々なことを考えそしてこうやってきたのだ。

「あやまるに来たの(ママ)」

「どっちが」

「こうやって、いろいろ兄様を苦しめるよりは、こゝから出た方がいい、と思った。」

「馬鹿な」

多喜二は、前日つまり 11 日の夜に書いた日記を読ませた。こうあった。

「今夜彼女がちょっとした事に対して、自分に答えなかった為、とうとう自分が本気に怒ってしまった。いくら云っても、だまっている。一言も云わない、いくら云ってもだ、自分はその顔を見ていると、ムラムラとしてきた。

然し、自分が、『どうした、えゝ』ときいているうちに、どうしても云えなくなってしまった、と云っている。

自分には理解が行かないことだ。けれども、自分の気持ちも分かってくれたし、それに、唇をピクピクとケイレンさして泣かれたとき、自分はタキ子の神のようにウブであるのを知った。直覚でそうきた。

自分は本当に彼女を愛している。彼女を失うことは自分の『死』を(どんな意味でも)意味している。彼女が自分の胸にあって、幸福であることを祈る。(そのくせ、何時でも、彼女をイライラさせたりする自分をゆるしてくれ。)」

読んでいるうちに、タキの眼に涙がうかんできた。2人は手を取りあった。そして涙のうちにキッスをした。

多喜二は書く。彼女は色々のことで、キリストが十字架を負ったように、とても苦しんでいるのだ。然し自分が彼女を愛している以上、彼女は幸福だ。色いろなイヤなこと、困難なことを耐えてゆこう、と⁽⁶⁶⁾。

2人ともまだ子供っぽいのだ。タキはお客からの手紙を、捨てればよいのに、捨てるべきなのに、箱に入れてもっている。多喜二はそれを時々読む。

(66) 『全集』第7巻, 29 ページ。

多喜二は、6月14日の夜、寝ながら瀧子にチェホフの『燈火』の「唄い女」すなわち淫売婦を、瀧子に読ませた。多喜二は「彼女は案外平気な顔をして読んでいたらしかったが……」と書く。

多喜二は、小説「師走」を、瀧から聞いた彼女の家の話を入れて作った。

小説「曖昧屋」も書いた。つまり売春宿である。これを訂正して小説「酌婦」を書いた。これを瀧子に読ませたのだった。

8月15日に「瀧子は『世の中が初ちゃん一人位を引き倒すなんて朝飯前だ』と云っている。……これは面白い、そして重大な事である。」初ちゃんというのは、多喜二の小説の主人公で、売春婦である。

多喜二の愛はどんなものだったか。多喜二はどうして瀧子を抱かなかったのか、結婚しなかったのか。まず、花柳病の心配があった。次に彼女が苦界にいたことが気になった。純潔の問題である。それは当初から知っていたのであった。それを多喜二はぐずぐず悩んだ。初めからそのつもりで知っていて、救いだしたのに、であった。また、お客の問題もあった。過去の瀧子のお客が話題に出てしまい、気になるのである。次に多喜二は、瀧子に教養をつけて貰いたかった。作家の奥さんになるには、教養が必要だと思っていた。これは時々した女子大発言と関係がある。最後に、彼は東京に出たかった。作家になりたかった。瀧子の存在が邪魔になるかもしれないと、悩んでいた。

一方、タキとしては不安である。多喜二が、自分の過去は気にするな、といつもいっている。しかしいつも娼婦ものを書いている。そしてタキに見せている。気にするなといつも言うことで、本人タキは気にしてしまう。反対に彼はそれを気にしているわけである。そういう意味では、多喜二は気が付かない人だった。瀧子は、はじめ結婚するはずだったのだが、どうして結婚してくれないのか、分からなくなった。最後に多喜二は、いつも、東京に出たい、作家になりたいと言っている。

9 初体験

大体、多喜二が遊廓にあがって、女性を買った初めての経験は、1926年10月21日から22日にかけて⁽⁶⁷⁾の夜である。それも女性と一緒にセックスをしたかどうかははっきりしない。瀧子が多喜二の家にいる時代、それも最後の時期である。

多喜二は銀行がひけて、よく夜遅くまで遊び回ったこともあった。文学仲間と談論して夜遅くなったことも多かった。

この日、彼は初めて友人たち、つまり斉藤次郎と武田と、遊廓に遊んだ。北廓か南廓かのどちらかである。私は南廓だと推定している。ある家で、3人が写真をみて、女性をそれぞれ選んで、部屋に入った。多喜二は、女性と寝ないつもりだった。そして、相手の娼婦と話を始めた。「幾才?」「何処からきたのか?」「名は?」「どうして来るようになった?」「家の犠牲です。初め酌婦だった。5年勤めた。その後娼婦になって4年。」「酌婦として初めて処女を破られたのは? その経験は? 借金はいくらある?」その他、その他。多喜二としては、社会勉強・文学勉強のつもりで、しつこく聞いている。しかし娼婦としては、概して、こういう客は困るのだ。何年も娼婦をしている彼女らは、現実を忘れたい。勤めは機械的に行えば、その方が気が楽である。それなのに、つらい自分の状況を再認識するのは、いやなセックスをしないとしても、嬉しいことではない。多喜二はそういうことは想像できなかった。

多喜二は、遊廓に上がったことを、日記では、over the hillと書いているから、我々は分かる。遊廓が坂を上がったところにあるからかもしれないし、もっと即物的な意味から、そう暗号を使ったのかもしれない。

(67) 同, 77-81 ページ。

10 瀧子の家出

瀧子が家にいる時期の多喜二の日記には、瀧子についての記述は、さほど多くはない。一緒に生活をしているので、多分そうなるのだろう。しかし、その日記では、「疑惑」について数回出て来る。つまり瀧子の過去の男性関係への疑惑である。多喜二は女性関係について極めて潔癖であったので、より一層、瀧子の男性関係が気になるのだった。なにしろ友人たちが遊廓に行っても、彼はめったに行かないのだった。当時の男性としては珍しい。

家では、多喜二は、瀧子にかんする疑惑について、何か具体的に気になることが起きると、数日、悶々としていた。そして多喜二は瀧子と話し合い、解決にいたる、というわけだった。多喜二が純情な男だけに、かえって一層面倒であり、仕末にわるい。多喜二はまた、年齢が若かった。さて、後述するように、瀧子には男性関係では1つの大きな秘密があった。多喜二に救われる際に、瀧子はそれを語らなかつた。語るチャンスも、余裕も、雰囲気もなかつたからであろう。そんなことを話したら、多喜二に捨てられそうな事件である。さて、いちいち疑惑を晴らす時に、瀧子がそれら疑惑について釈明する態度と内容は、それぞれのケースで、おそらく嘘ではなかつた。ただし、1つの秘密を除いてである。瀧子は、その秘密は語れなかつた。従来の伝記や研究が云うのとは違って、多喜二の家において、彼女は心理的にはつらかつただろう。

瀧子は1926年11月11日に、一通の手紙を置いて、家人の誰にも悟られないようにして多喜二の家を出た。

訂正

『人文研究』89

57 ページ 13行 去れ → され